

夫婦同伴・北アルプス主脈縦走完成

昨夏（2006年）7月27日～8月2日までの7日間をかけ、船窪小屋から水晶小屋までの空白になっていた山域を登り『夫婦同伴での北アルプス主脈縦走を完成』させました。

所属している東三河山ぽ会（労山）の夏合宿の一環で、私達夫婦と安藤桃子さんの三人パーティでチャレンジしました。

七倉 船窪小屋 船窪岳 不動岳 南沢岳 烏帽子岳 三ツ岳 野口五郎岳 真砂岳 水晶小屋 鷲羽岳 三俣小屋 三俣蓮華 双六岳 双六小屋 鏡平山荘 わさび平小屋 新穂高温泉のコースでした。

仕事一途の家内は58歳を過ぎ登山を始めました。家内は自分の年齢を感じ始めた頃、現在所属している東三河山ぽ会に入会させてもらい、本格的に登山をするようになりました。

一時はクラブの人達の応援もあり65歳で槍ヶ岳・北鎌尾根を登りました。

又、3月やっと積雪が落ち着いた宝剣岳にも極楽平から登りました。

5月の雪深い岳沢から奥穂高岳の南稜を登り奥穂高岳登頂後、穂高山荘、涸沢をノンストップで下り、その日の内に豊橋まで帰る離れ業をしたこともあります。

海外では、スイス・アルプスのブライトホルン、メンヒ、モンテローザを登頂しました。

家内の最高標高の登頂はエベレスト・ビューポイントのひとつ、ネパール・カラパタールの5545mです。

昨年夏はイタリア側からリスカムにチャレンジし4200mの科尔まで登り、山頂を目前にしましたが天候不順のため断念せざるを得ませんでした。

その後、再チャレンジを盛んに口にしています。古希を迎えた家内はすっかり元気を無くしましたが、今回は執念と気力を振り絞っての挑戦になりました。

同行の安藤桃子さんはNHK・TVを始め幾多の民放で紹介されている岩登りの有名人です。

自宅の居間を吹き抜きにして壁に人工の岩を埋め込んで人工登攀のゲレンデを作ってしまった方です。

彼女は国内の主だった岩場を登る機会が多かったのですが、今回のように長丁場を歩き続ける事がなかったことと、北アルプスの中でも仲々、入山する機会の少ない山域なので同行して下さいました。

私は2004年秋にシシャパンマ中央峰（8008m）に登頂し、2005年夏はヨーロッパ・アルプス9座目のアイガーを東山稜から登頂し、南稜からユングフラウ・ヨッホへ抜けました。

然し最近では、毎朝、筋肉トレーニングとストレッチを20分前後続けないとその日、身体が動かない様になって来ました。

老化と懸命に戦っている状態のなかでの夫婦同伴・北アルプス主脈縦走を完成させる締めくくりの山行になりました。

7月27日（木）

青春切符を御存知ですか？

1日中、JR乗り放題で2300円なのです。但し、新幹線、有料の特急はダメで、快速とドンコウを乗り継いでその日の内に行ける範囲に限られます。

学生向きの物が、今では中高年の利用者が多くなり、逆に学生が新幹線に乗っている始末です。

今回、その青春切符で出掛けました。

パソコン『えきから時刻表』で検索すると簡単に知る事が出来ます。

豊橋		9：36発
金山	10：24着	10：34発
中津川	11：32着	12：00発
塩尻	13：43着	13：53発
松本	14：08着	14：11発
大町	15：07着	

通常の行き方より乗換えが2回多いのと、1時間程時間がオーバーする事を楽しむゆとりがあれば1人で6000円も安く到着する事が出来るわけです。

大町駅前高山用の時計の電池を入れ替えるべく時計屋に行くがどうしても蓋が開けられず、今回の山行中不自由をすることになりました。

タクシーで七倉まで行く。

七倉山荘の今夜の客は我々3人だけ。しかも暫くぶりの客と言うことで大歓迎を受けました。



4年前に此处のオーナーになった百瀬啓正氏60歳と調理担当の桑原巖氏70歳を含む5人で大宴会となりました。



まずは百瀬さんが七倉山荘のオーナーになるまでのお話から始まる。

56歳の時大メーカーの役員に推薦される株主総会を直前にして七倉山荘の経営者となることを決心されたようです。

17歳位から三俣山荘の経営者・伊藤さんに傾注して登山に熱中するようになり、とうとう若い時の夢を果たす事が出来て現在は大変楽しい日々を送っておられるとの事です。

桑原さんは定年後、三俣山荘の伊藤さんと三俣蓮華岳から湯俣川に下りる伊藤新道開発に力を注ぎながら烏帽子小屋、水晶小屋を担当し現在は七倉山

荘に身を置いておられます。



21時を廻っても飲み会も歌会も終わる様子はさらさらないので、ほうほうのていで引き上げさせていただきました。

寝る前に2度目の温泉につかる。

湯元からの引き湯を止めて水を沢山流し込んで湯加減をして身体を浸すと溢れた湯が勢いよく流れ出す贅沢さです。

沢音や虫の音を聞き、暫し至福の時を過しました。楽しく嬉しい一夜でした。

7月28日(金)曇、午後雨、夜風雨強し

七倉山荘	6 : 0 5
唐沢のぞき	8 : 3 0
鼻付八丁	9 : 2 5
天狗の庭	1 0 : 3 5
船窪小屋	1 1 : 3 5

2004年夏、扇沢 新越山荘 針ノ木岳 - 蓮華岳 七倉岳 船窪小屋 七倉のコースを歩いた時の印象で、今から登る七倉尾根の下りにへきえきした記憶が強く残っていました。

七倉山荘6 : 0 5百瀬さんと桑原さんに見送られて出発。

七倉沢の橋の袂の観光案内所から『山行計画書を提出してから出掛けて下さい』と呼び掛けられる。昨夜、ポストに入れた旨を伝え、橋を渡りきった所で右折し、林の中のダラダラ坂を少し進み登山口の標識を見て、左の尾根に取り付くと北アルプス三大急

登の始まりになる。

道は整備されているがつづら折りの道を幾つも重ねる内『唐沢のぞき』8：30に出る。周りは樹木におおわれ右下の沢を見る事は出来ない。

急登は更に続き露岩や木の根が道に絡み、かなり歩きづらい。

胸突き八丁以上の急登を意味する『鼻付八丁』はハシゴが連続して難義する登り坂だ。



此处を越えしばらくすると、辺りを覆っていた樹林帯を抜けて、ようやく急登もひと段落する。

『天狗の庭』10：35

視界が開けた台地からは眼下の高瀬ダムを挟んで左に燕岳 餓鬼岳、右に烏帽子岳 野口五郎岳に続く山並みが望まれる。

心配していた雨が降り始めカッパを着る。

視界が開けた尾根道をひたすら上へ上へと登り続けるとハイマツに覆われた平地に出る。



小屋が近付いた予感をしながら更に進むと、お花畑の中のトラバース道をふさぐように残雪が大きく広がっている。その脇に珍しく雷鳥夫婦と5羽の子供を見付ける。

一帯は濡れたハイマツの新緑と砂礫の白色が対比をなし、日本庭園の雰囲気をかもし出している。ロープで仕切られている砂礫の一角には可憐なコマクサがびっしりと咲いており私達を歓迎してくれる。

周りの花々に見とれている内に船窪小屋が見えてきた。

ランプと囲炉裏のもとでお母さん手作りの山菜料理が楽しめる船窪小屋に到着する。

お母さんが鳴らす鐘の音と熱いお茶とで出迎えてくれました。11：35



7月29日(土) 風雨強く停滞

昨夜から風雨が強いので迷うことなく停滞とする。

本日の予定コースは今回の山行中一番の難所で、しかも途中で小屋がないので、どうしても烏帽子小屋まで行き着かねばならない。

難所の理由は高低差が大きい3箇所の通過と不動沢側の崩壊が激しい船窪乗越 不動岳の尾根道をへつるよう長時間歩かねばならない危険が心配されるからだ。

更に、雨に濡れた砂礫は崩れやすいので停滞と決める。

ツエルト、ガス、コンロは持参しているが安全登山で行きましょう。

小屋での一日のスケジュール

朝食：	5：00
昼食：	10：00
焼きおにぎり	14：00

夕食： 17:00

就寝： 20:00



停滞と決まれば気が楽になり、昔懐かしい囲炉裏の番をする。

要らなくなった紙くずを焚き付けにして豆炭に火をおこす。

30年物の小屋の守り主と言われている鉄びんの口から湯気が立ちのぼる囲炉裏の脇に座っているだけでバカに気持ちが落ち着くを感じる。

2時頃になると小腹がすいて来たので、昨日、七倉山荘で作ってくれた弁当の大きなニギリメシを焼きオニギリにする。3人共偶然梅干のニギリメシを残していたので安心して網デッキで焼くが仲々もちが上がらないしていると、ご主人が豆炭の上に直接置くよう教えてくれる。

お母さんがピンに詰まったフキ味噌を出してくれたお陰でホロニガさがとてもニギリメシとマッチして美味しく食べられました。



明日、長野放送の取材の機器を荷揚げすべくネパール・クムジュンから毎年夏にアルバイトに来ているペンパさんが七倉へ下りて行った。

昨夜はネパールの恋歌『レッサンピリリ』を彼の素

朴さで歌ってくれて大変楽しかったことを思い起こす。

彼の役割は膝の悪いお父さんを助けてテント場下からの水汲み、道の補修、特に船窪乗越～平の渡しまでの針ノ木谷の手入は大変なことのようです。電気がないため冷蔵庫が使えないので鮮度の物の買出しのボッカ等々です。

正午を廻るとずぶ濡れになった登山客等が到着し始める。その人達が段々増えて、囲炉裏を囲んで団樂のひと時が続く。

七倉尾根の岩小屋の下でオオヤマレンゲを見た、蓮華岳を登る途中の大岩の右下にミヤマナナコナの白があった、やはり蓮華岳でミヤマオダマキを初めて見て感激したことなどが飛び出す。



そこへお父さんが『不動岳の標識は頂上に立ってないんだ』と謎々のようなことを言い始める。

答えは、頂上にはコマクサが沢山自生しているので標識を頂上手前に立ててあるのだそうです。頂上標識と一緒に記念撮影をする人達がコマクサを傷めないために相当手前に離して立てたと気の入れようでした。山への愛情が伺われお言葉です。



昨夜に引き続き堺市の淵上さんのビデオ鑑賞会が夕食後始まる。

彼は自称、『船窪小屋の準居候です』と名乗っている。

明日、NHK・TVのスタッフが船窪小屋の取材で登って来るそうです。その撮影器具のボッカで七倉へ下山したネパール人のペンパさんの代わりに淵上さんが御持て成しをしてくれる事になりました。彼は定年後、偶然見た山の写真集に魅せられ66歳から登山を始めました。多くの山の写真を撮るうち、動画の魅力に引かれビデオCDやDVD製作に現在はハマっているようです。

DVDは船窪小屋本編の他、別編として6月初旬の七倉尾根に咲く見事なアズマシャクナゲ、7月初旬のオオヤマレンゲ、7月下旬の蓮華岳のコマクサ、8月下旬の赤沢岳～針ノ木～蓮華岳～七倉岳から北アルプスを展望した稜線縦走の4編を見せて頂きました。

電気の無い小屋なので小さな画面で、バッテリーが無くなれば単三電池で対応出来るように工夫した物を持参されていました。

淵上さんのように年に数回来られる人、毎年友達と連れ立って来られる人、沢山の山男、山女に慕われている小屋は他には無いでしょう。

他の小屋では経験できない事を見たり、聞いたり、感じたりした1日でした。

インターネットの『船窪日記』で検索すると、『山の上のお母さん』が現れます。

小屋に来る一人一人を大切にすご夫婦の長年の積み重ねが北アルプスで一番の偏狭の地にある船窪小屋のファンを増やしていったのでしょう。

サービス業に関する私には大変勉強になりました。

夜中、満天の星の中から北斗七星を探しだし、明日の好天を確信して安眠する。

7月30日(日) 快晴

小屋の裏から日の出を撮る。

何時、何処でも日の出は未来への出発、明日への希望を感じさせてくれる。

日の出を撮る事が出来1日待った甲斐がありました。今回の山行一番の正念場の今日一日を頑張れそうです。



小屋の前でお父さん、お母さん、桃子さん、家内と私とで記念撮影をして出発する。

お母さんが安全祈願の鐘を何時までも鳴らし、手を振り続けてくれました。

船窪小屋	5 : 3 0
船窪岳 (? ? ? ?)	7 : 0 0
船窪岳第二ピーク (2459m)	8 : 3 0
不動岳 (2595m)	1 2 : 0 0
南沢岳 (2625m)	1 4 : 1 0
烏帽子分岐	1 5 : 3 0
烏帽子岳 (2628m)	1 6 : 0 0
烏帽子分岐	1 6 : 3 0
烏帽子小屋 (泊)	1 7 : 1 5



小屋から北へ登り気味に進み、ハイマツ帯の中で七倉岳、蓮華岳との分岐の道標を右に見て進むと真正面にどっしりと構えた剣岳を見る。真っ直ぐに歩くと昔の小屋跡で今のテント場を通り抜ける。道が細くなり、いよいよ不動沢側の崩壊地を巻く様

に相当下った船窪乗越で針ノ木谷への道と船窪岳への道と分かれる。船窪岳への道はかなり急登だ。



登る先々にハシゴやワイヤーが取り付けられている。山頂を1つ越え、又下った鞍部から2459m峰(船窪岳第二ピーク)の登りは更に険しさを増す。岩場が続き、ワイヤーやロープが張られているが気の抜けない箇所が次々と現れてくる。



左手の不動沢側が崩壊して切れ落ちている淵を登るが、所々で崩れ落ちてしまい新しい踏み跡が右の樹林帯に食い込んで新たに付けられている所を通過する。しかも昨日の雨の影響だろうか地割れしている箇所が見られ平静ではいられない場面もあった。

本コース一番の難所だ。

『船窪岳第二ピーク峰の方が高いのをいぶかってか船窪小屋のお父さんにちなんで松沢岳と呼びたい旨の立て札が立てられていた。』

2459m峰を登り切った後、クサリが張られた小さな峰をもう一つ乗り越すとやっと足下の危うさ

は無くなり道は穏やかになる。これまで針葉樹林帯の中を歩く所もあり日差しからさえぎられ大変助かっていたが、不動岳に近づくと眺めの良い稜線を辿って行くようになり、南北に細く伸びた山頂部に至る。

ハエマツと砂礫が入り混じり日本庭園を思わせる山頂からは剣岳から立山、山服の雪解けでヤギ印が現れた五色が原、大きなカールを抱いた薬師岳が見られる。



お父さんが言っていた山頂のコマクサを避けて手前に建てられた不動岳の道標前で記念撮影をする。2595m、12:00



折角山頂に立ったのに下るは下る、勿体無いほど下り南沢岳手前のコル13:00着。鞍部に着いたからには、今度は登るより仕方がない。

左側の崩壊は引きつづいて続き断崖絶壁の淵を黙々と登っていると、上から下って来た1人の若者が『上にあがれ!! 上に上がれ!!』と大声で怒鳴り付けて行過ぎる。道が崩れかかっているので一段奥に新しい踏み跡が出来つつある道に安全のため踏み

変えろと家内に向かって言っているのだ。
 長靴を履いているのでこの先の烏帽子小屋の者だろうと察する。すれ違いざまだったので後姿しか見えないが物腰や物言いから三俣山荘・伊藤さんの長男だろうと確信しながら『親切に有難う』と心の中でお礼を言う。



船窪小屋と烏帽子小屋との境界が不動岳なので見回りの途中であろう。

この人達が道を整備したり、ハシゴを掛けたり、ロープを張ったりしてくれるお陰で私達が安全に登山が出来るのだと感謝、感謝です。

南沢岳はこれまでと同じようにハエマツと砂礫のなだらかな山頂で、真中の大石に**南沢**と赤字で記されている。2625m、14:10

家内と桃子さんをデジカメで撮ると予定より遅れ気味の時間を気にして早々出発する。

南沢岳を越え、ガラ場を下り小さな雪渓を渡ると目の前下に湿地帯の田んぼを従えてそそり立つ岩峰の烏帽子岳が見え始める。

緑のハエマツ帯に白い残雪や水をたたえた池が見られる『烏帽子田圃』を抜けると烏帽子岳下の分岐に出る。



ザックをデポして右に進み、整備された道を登るとクサリ場2ヶ所に出る。階段状の岩場を登ると、そそり立つ岩峰に挟まれるように烏帽子岳頂上の道標が建っている。2628m

目の前の前烏帽子を越せば小屋のはずだがペースが上がらないので、小屋の最終受付時間17時が気になり桃子さんに先行してもらおう。

17:15 烏帽子小屋着。



桃子さんがコーラを買って待っていてくれた。家内をかばって1日中先行してくれた桃子さん有難うございました。

7月31日(月) 晴れ、梅雨明け宣言される

烏帽子小屋	5 : 40
ニセ三ツ岳	7 : 03
三ツ岳 (1846m)	7 : 35
野口五郎小屋	8 : 50
	(9 : 15)
野口五郎岳 (2924m)	9 : 55
真砂分岐	10 : 38
東沢乗越 (2734m)	12 : 40
水晶小屋	14 : 00

5時の朝食を済ませて小屋出発5:40
 小屋を出てすぐの池の畔に1張り残っているテントを左に見ながらキャンプ場を抜けて下り、鞍部から三ツ岳に続く稜線を登り返す。大きく横に並んで聳え立つ四つのコブを見上げながら、三ツ岳のガラ場をひたすら登り続ける。

ひとかたまりに咲く岩キキョウや群生するコマクサを足下に見ながら登り続ける、幸せな時間が過ぎる。



三ツ岳の標識 7 : 0 3 を見るが何か中途半端な感じがするまま大石の重なるガラ場の急登を登り続ける。頂上直下で道は緩やかになり、山頂を巻くように進むと白砂とハイマツが織り成す稜線になり、息をととのえしばらく進むと三ツ岳の標識 (1846m) が又、又現れる。

これが正真正銘の頂上と思える。 7 : 3 5
コブが横に 4 ツ並んでいて何故三ツ岳かと思ひながら登ってきたが、若しかして稜線沿いの小ピークを数えているのだろうか。

此処から先は、展望を楽しみながらの快適な稜線歩きになる。左手の餓鬼岳の先に表銀座の燕岳 大天井 西岳 槍ヶ岳 大喰 中岳 南岳 穂高連峰まで望まれる。

右手の読売新道の水晶岳 赤牛岳の又先に剣 立山 五色が原 薬師岳が重なり合っ構えている。途中、トイレに行きたくなったので先行して野口五郎小屋で二人を待つ。 8 : 5 0

小屋の外には長梅雨を越した布団が所狭しと干されている。

烏帽子小屋で一緒だった元気で若い韓国の 1 5 名が賑やかに通過して行く。

二人を待つ内、太陽の周りに大きな日輪が掛かっているのを見る。青空にすじ雲が現れその間に虹を思わせる彩雲が一時見られた。

天気が崩れる前兆にならねばよいかと祈る。
二人の到着 9 : 1 5 を待つてガラ場を詰めるとほど

なく巨岩が積み重なる一角に出る。これを過ぎて更に進むと、大きくなだらかな山頂の野口五郎岳 (2824m) に着く。 9 : 5 5



大きな石を背丈ほど積上げたケルンの先に道標を差し替える作業を 3 人でしている情景に出会う。石山の穂先に建てた柱に新しい野口と五郎の二枚の標識を打ち付けているのだ。

作業している小屋の人達に『ご苦労様です、有難う御座います』と自然な気持ちで声を掛ける。

三ツ岳 野口五郎 真砂 東沢乗越へとドデカイ白髪頭の丸坊主を思わせる山容を延々とトラバース気味に下って行く。

真砂分岐 1 0 : 3 8

目の前の高さに見えていた水晶小屋がどんどん下っているうちに、いつの間にか首が痛くなるほど見上げなければならない鞍部まで、またまた下ってしまった。東沢乗越 2734m 1 2 : 4 0



朝から白い砂礫のガラ場ばかりを歩き通して来たが此処からの登りは赤茶けたザラザラした岩場混

じりの稜線に変わる。

登りになると家内のペースが一段と上がらなくなるが、こつこつ歩き通す気力はたいしたものだ。

先を歩く桃子さんが心配りして着かず離れず、励まし励まし家内をリードしてくれている。

家内は最後の気力を振り絞って一步一步を踏み出し、やっと登りきると目の前に新しくなった水晶小屋が現れる。 水晶小屋 14:00



数年前、黒部湖から読売新道を登り、この水晶小屋にすし詰めで泊まった時の悪い印象が未だに残っていたが改装して大変明るくなっていた。

小屋の広さは以前と同じで北アルプス中一番小さな小屋には違いなく、今日の宿泊客26人で満杯の有様だ。入口脇の受付に座っている青年が三俣山荘・伊藤さんの次男だと知る。新婚夫婦で小屋をまかない始めたばかりの様子だ。

西方の剣、立山、薬師岳が雲に隠れ見えなくなった。水晶岳は見えるがガスで時々霞むようになる。今日の予定では三俣山荘までコースタイム2時間半を掛け16時00到着になっているが、すでに1時間予定より遅れているし、雨模様にもなってきたと思える。

桃子さんと相談して此处、水晶小屋泊りとする。

三俣山荘まで行けないと予定の明日、新穂高温泉から帰豊出来なくなる可能性が強くなる。

8月1日 水晶小屋 鏡平小屋(泊) 8月2日 鏡平小屋 新穂高温泉 豊橋と予定変更する事を小屋の裏の高台から留守本部に連絡するが通話

出来ないで、たまたま通話出来た後藤さんに言付ける。

8月1日(火) 霧、薄日、晴れ

水晶小屋	6:20
ワリモ乗越	
岩苔乗越	
黒部川水源地標石碑	8:08
三俣山荘	9:00 ~ 9:30
三俣分岐	10:30
双六小屋	12:35 ~ 13:15
鏡平分岐	14:30
鏡平小屋(泊)	15:00



雨模様の天候を伺っているうち予定より遅れ6:20出発する。

三俣山荘までは 読売新道を登った時辿ったワリモ岳 鷲羽岳の稜線ルートと 黒部川源流の沢を下り雲の平からのルートの合流地点から三俣山荘まで登り返す2つのルートがあり、我々は のルートをとる。



ワリモ岳、鷲羽岳の裾野を流れる黒部川源流の沢沿いを咲き誇る花々を楽しみながら下る。

ガスっていて何も見えなかったが日が昇るに従いワリモ岳、鷲羽岳の頂上が見えるようになる。

黒部川水源地標の文字が刻み込まれた石碑 8 : 0 8 から左折し、稜線に向って八エマツ帯を登り返すとテン場が現れ、さらに進むと一面八エマツ帯の中に二階建の三俣山荘が現れる。



北には、緑のハイマツ帯と赤い屋根の山荘の向うに鷲が羽を広げた形で鷲羽岳が雄々しく羽ばたいている。東には、赤みを帯びた岩肌の硫黄岳、赤岳の奥に表銀座の燕岳 大天井岳 西岳 槍ヶ岳が霞んで見える。

これから進む南には朱色とピンクの小屋の屋根の先に雪渓が広がり、ハイマツで覆われた高台の上に岩を重ね合わせた頂上が頭だけを恥ずかしそうに出している三俣蓮華岳が望まれる。



西は雲ノ平への稜線で隠れているが三俣蓮華岳頂上からは水晶岳、黒部五郎岳が見られるはずだ。

2階の喫茶室で家内と桃子さんはケーキとコーヒーを注文する。

私はココアとケーキを注文するが仲々出してもらえないしていると奥さんが応援に来られ『ココアは時間が掛かりますが宜しいですか』と言われ、ホットミルクに替える。

すっかり年を取られた伊藤さんと奥さんとで用意をしてくれる。

『水晶小屋は、この秋から隣接地に造作して来年には倍の広さの小屋にしますから又お越し下さい』と挨拶される。

息子たちがそれぞれの小屋を確り守り、ご自身も今なお山に情熱を傾け、将来に夢を燃やしてみえる姿は私達二人にとってこの山行の一番のおみやげでした。

ハイマツ帯の一角のテン場を通り抜け雪渓の淵を辿り登ると三俣分岐に出る。 1 0 : 3 0



この分岐から 丸山岳 双六岳 双六小屋の稜線ルート 丸山岳 双六岳の巻き道 双六小屋 三俣蓮華岳 双六岳の裾を巻くルートの三つのルートに分かれるが何れも時間は同じようだ。

家内とは読売新道を太郎平～折立まで縦走した時三俣蓮華に登っているので、私だけが記念に三俣蓮華岳の頂上を踏み ルートに行く家内と桃子さんを追うこととする。

裾を巻くルートのゆっくりした下り道を楽しむが稜線通しより大分ふくらんで遠い道のように思える。

最後やはり登り返しがあり稜線と出会うと双六小屋に到着する。 1 2 : 3 5



桃子さんがラーメンをご馳走してくれる。
此処まで来ると後一日と言う安堵感が沸いてきて、赤字でラーメンと書かれたチョウチンが思い浮かぶ里心とで美味しく戴けました。
桃子さんの友人ご夫婦と出会い今日の泊まりの鏡平小屋に向う。
小屋を取り巻く石積の囲いを右折して広いテン場を横切ってトラバース気味に弓折岳を目差す。



此処から先は大きな登り下りのないのが分かっているが、疲れのせいか気分が楽になり過ぎたせいか少しの登りがこたえてきた。行く手に尾根続きの笠が岳が見られるようになる
左側は分かれたばかりの西鎌尾根が衝立のように大きく横たわり槍ヶ岳に続く。槍から右側に穂高連峰までが手に取るように間近に連なっている。
何年前か家内と上高地 西穂高 奥穂 北穂 槍ヶ岳のルート歩き3000m以上の頂上を8つ踏んだ事などを思い出しながら進む。

弓折岳手前の鏡平分岐には沢山の人達が思い思いに過している。14:30
左真下の緑の中に鏡平小屋の赤い屋根と池の反射が時間を越えた静けさの中にぽつんと見られる。



この遅い時間で登る人が多いのにびっくりしながら下って行くと湿地に掛けた板の歩道を渡り鏡平小屋に着く。15:00

建替えられた小屋の前に広がる板の間の広場には三々五々語らいあい、酌み交わしている沢山の人達で溢れている。
ザックを降ろし直ぐに、いちご氷を注文する。ほてった身体を冷やし、乾いたのどを潤してくれる。
平地では何気ないものが山では天国、珠玉に思える瞬間です。

周りが薄暗くなる頃、部屋の窓越しに槍ヶ岳・北鎌尾根～穂高岳が夕映えでシルエットに浮き出す最高の情景を鏡平小屋三回目にして始めて見させてもらえました。



今夜は二階の板の間で布団一枚に一人で、しかも間隔もゆったりしたスペースで身体を伸ばすことが出来そうです。

更に嬉しい事に、7月27日七倉温泉の畳の上に寝て以来6日目でいびきにも悩まされずゆっくり就寝出来ました。

8月2日(水) 晴れ

鏡平小屋 6 : 1 0
わさび平小屋 8 : 3 2 ~ 9 : 0 5
新穂高温泉バスターミナル 1 0 : 0 5

新穂高温泉バスターミナル 1 1 : 4 0 発
高山駅 1 3 : 1 3 着 1 3 : 4 0 発
名古屋 1 6 : 0 9 着

小屋を出てすぐの池に映る槍が岳 穂高連峰の眺めはまことに素晴らしい。風がないので磨き上げた鏡に映っているように澄んでいる。



大きな石がゴロゴロしている樹林帯の中の道を下る。登ってくる沢山の人達とすれ違うようになる。この辺りで出会う人達は入山1日目で元気いっぱいだ。

挨拶する声も大きくはりがある。

小池新道のシシウドガ原の道標からは石ころだらけの先に蒲田川が見えるようになる。

大きかった石が段々小さくなり、傾斜がなだらかになると秩父沢と出会う。丸太を渡した橋の回りは休

憩の人で賑わっている。冷たい沢水で顔を洗おうとひと頑張り石ころ道を歩き、涸れ沢を2~3本渡ると蒲田川の右岸の車道に出る。白樺混じりの林を歩くと待ちに待ったわさび平小屋に到着。

8 : 3 2 ~ 9 : 0 5



桃子さんの友人夫婦のお勧めの冷麦を早速注文する。

沢水で冷やしているトマト、スイカ、キュウリも美味しそう。スイカ丸ごと¥2000円と大きく書かれている。

冷麦を味わっている余裕は無く一気にすする。2~3杯食べられそうだが、あと1時間で新穂高温泉のバス停で6日ぶりに村営の温泉に入られると思うと長居無用と早速出発する。



三大急登のひとつ・笠が岳新道登り口を右に見て歩を早めるとロッジやキャンプ地が見られるようになり新穂高温泉バスターミナルに着く。

ここで終点です。10 : 0 5

船窪小屋 船窪岳 不動岳 南沢岳 烏帽子 三ツ岳 野口五郎岳 真砂岳 水晶小屋の空白山域を埋め、北アルプスの主脈を歩き通すことが出来て一区切り付きました。



広場の観光案内所で聞くと高山廻りで名古屋に出る方が都合良いことを確かめた後、早速、無料の村営温泉につかる。

この時間では貸しきり状態。6日ぶりに身体を洗い、湯船に入ろうとするが熱過ぎて入れたものではない。長いゴムホースで思いっきり水を入れて、ザーザー湯を乗りこぼれさせながら手足を伸ばす。

贅沢、贅沢！！天国、天国！！

奈良高校のワッペンを付けた一行6人をはじめ、大きなザックを持った登山客で満員のバスが発車する。

高校生を見ながら、遠い昔の自分を懐かしんでいました。

新穂高温泉バスターミナル 11:40 発

高山駅 13:13 着～13:40 発

名古屋 16:09 着

高校二年生の時、燕岳 槍ヶ岳の北アルプス表銀座を歩いて以来、自然から沢山の事を学びもしましたし、自然に挑んだ事もありました。

これからは自分の年齢、体調、心境など色々考え合わせると、自分の力量の中で大きな自然と在るがままに楽しく付き合っていくように努めることだろうと思います。

これから家内と一緒にどれだけ長く歩き続けられるのだろうかと思いながら帰路に着きました。 完